

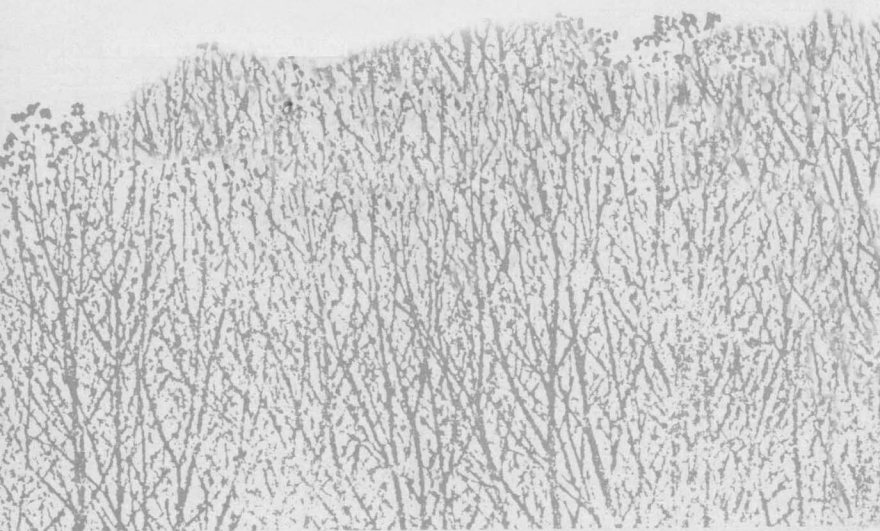
北杜夫の文学世界

奥野健男



北杜夫の文学世界

奥野健男



中央公論社

北杜夫の文学世界

定価 680 円

昭和53年 1 月 31 日印刷

昭和53年 2 月 10 日発行

© 1978 検印廃止

著者 奥野健男 発行者 高梨茂 印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社 東京都中央区京橋2丁目8番7号 振替東京2-34番

目

次

原っぱの文学

昆虫の王国

初期作品の魅力

笑いの質

*

「幽 霊」

短篇について

「岩尾根にて」「夜と霧の隅で」他

短篇集『羽蟻のいる丘』

短篇集『遙かな国 遠い国』

「どくとるマンボウ航海記」

「榆家の人びと」

120 110

89 77

69 40 27 7

「さびしい王様」

「酔いどれ船」

「木 精」

*

北杜夫との交友

〈対談〉北杜夫／奥野健男

あとがき

掲載書誌紙一覧

北杜夫初刊本年譜

17
29
59
85
106
117
126
133
145
149

157

147

141

133

167

172 171

装幀・中野佳子

北杜夫の文学世界

原っぱの文学

人はなぜ追憶を語るのだろうか。

どの民族にも神話があるように、どの個人にも心の神話があるものだ。その神話は次第にうすれ、やがて時間の深みのなかに姿を失うように見える。——だが、あのおぼろな昔に人の心にしのびこみ、そっと爪跡を残していった事柄を、人は知らず知らず、くる年もくる年も反芻しつづけているものらしい。そうした所作は死ぬまでいつまでも続いてゆくことだろう。それにしても、人はそんな反芻をまったく無意識につづけながら、なぜかふっと目ざめることがある。わけもなく桑の葉に穴をあけている蚕が、自分の咀嚼するかすかな音に気づいて、不安げに首をもたげてみるようなものだ。そんなとき、蚕はどんな気持がするのだろうか。

この「幽霊」の書き出しに、北杜夫文学のライト・モチーフが、象徴的に語られているように思

われる。北杜夫をして、文学にかりたてるものは、幼少年期の不思議な感銘ではないだろうか。普通なら無意識の昏い茂みの中に隠されたまま、忘却の彼方に消えて行ってしまふ幼少年期の思ひ出が、彼の場合、敗戦前後の青春の一時期の透き通った感覚と体験とに照応して鮮やかに蘇つて来たのではないだろうか。「不安げに首をもたげた蚕のように」無意識から目ざめた彼は、幼少年期からのかすかな声に耳をかたむける。そして民族の神話を物語る語り部のように、彼は個人の神話を物語りはじめめる。はるか昔の純粋な少年の心になりきって……。

北杜夫は多くの熱心な読者を持っている。いわゆる文学青年や文学少女だけではなく、サラリーマンや主婦、老人から小学生にいたるまでその範囲はきわめて広く、ふだん小説など余り読まず、文学に無関心そうに見える人々までを愛読者に行している。その中には北杜夫でなくてはだめで、北杜夫の本は全部読むが、ほかの作家の本は全く読まないというような読者もいる。北杜夫の本は、小説でも随筆でも必ずベスト・セラーになり、その後ずっと版を重ねるロング・セラーとなる。

しかしこれほど読まれ、愛されているにかかわらず、北杜夫の文学を論じた評論はきわめて少ない。単にエンターテインメントとして読まれているのではなく、純文学作家として敬愛され、重んじられ、また個々の作品については多くの批評がなされているのだが、北杜夫文学全体について論じた評論は殆どない。ほぼ同世代の文学者である三島由紀夫、吉本隆明、井上光晴、高橋

和巳、あるいはもつと若い大江健三郎などが、評論家によって争って論じられているのと対蹠的である。ぼくは北杜夫文学の持っている文学性、さらには時代的、思想的な意義が、これらの文学者より軽いとは考えない。たとえば三島由紀夫とは、ほぼ同質と言ってよい文学的内実を持ち、その教養もそれぞれ別の裾野を持っているが重なり合い、その純文学に対しての表現の好みもある面では酷似している。純文学以外への興味は対照的であり、ひとりは政治やナシヨナリズムや天皇であり、ひとりは昆虫や自然や南極であったとしても、ぼくはそこに思想的な価値における高低を認め得ない。事実、空飛ぶ円盤への熱中ぶり、あるいは「少年倶楽部」に載った平田晋策や山中峯太郎や高垣眸や江戸川乱歩の作品についての陶醉においては一致し、いずれも熱心なSFファンであり、片方がボクシングやオリンピックに熱中すれば、片方は熱狂的なタイガースファンとして巨神戦に夢中になる。だからぼくはひとりが映画や楯の会の兵隊ごっこに熱中し、割腹自殺したことを、もうひとりがディラン登山や船乗りの冒険ごっこに熱中し、遭難死したかも知れないことよりも、特別に違う立派なこと、価値あることとは思わないのである。三島由紀夫の行動や死を時代思想に結びつけるのならば、北杜夫のディラン登山も、アポロの月ロケット基地の乞食巡礼も、時代思想に結びつけて考えたいのである。

しかし北杜夫の文学は一見、時代思潮とは無縁な文学に見えるようである。確かに北杜夫は政治について、アクチュアルな社会問題について発言することは少ない。だが人々はなぜ北杜夫の作品を争って読むのだろう。なぜ北杜夫でなくてはだめだとまで言うのだろう。そこにまぎれも

ない現代人の心情が表現されているからにほかならない。人々は北杜夫の文学から、忘れていた自分の幼少年期の神話を、ひそかに感じていた魂の憧れを、まるで少年のように新鮮な現実への視点を発見するのだ。味わい体験することはできても、いわゆる論理や批評的な論理語では解明しがたい、微妙な領域に北文学は成立しているのだ。

ぼく流に言わしてもらえば、北杜夫文学の「原風景」は「原っぱ」である。東京の山の手に残っていた野原のきれっぱしである。「原っぱ」の集団で遊ぶときのたのしさ、ベイゴマやメンコ遊びの隠れた濃密な空間を、また人気ひとけのなくなった寂しく不気味な「原っぱ」の凶々まがまがしい怖ろしさなどを、北杜夫ほどいきいきと描き出した作家はいない。「原っぱ」は「幽霊」における幼少年期の神話の舞台であり、生きた自然と接し、自然の驚異にめざめる場所でもある。また「楡家の人びと」の姉弟たちの遊び場であり、ベイゴマなどを通じ子供がはじめて餓鬼大将の支配する他人の世界、社会に参加する場所でもある。「原っぱ」は墓地や脳病院と接し、死んだ兄たちの墓や、気狂い女が首を吊った場所などがある、いわば死の世界と通じる場所でもある。

「原っぱ」が都会育ちの少年、特に戦前の東京の山の手育ちの子供たちにとって、どんなにかつかしい場所であったか、かけがえのない故郷、自己形成空間であったかについては、ぼくは既に「文学における原風景」という評論で、北杜夫などの作品を通じ詳述したことがあるので、ここでは繰返さない。ただ島尾敏雄、安岡章太郎、吉行淳之介、三浦朱門、三島由紀夫、山口瞳、辻

邦生、山川方夫、加賀乙彦、吉村昭ら、ほぼ同じ世代の大会生れの文学者たちと話していると、幼少年時代の共通の思い出は、「少年倶楽部」と「原っぱ」に落着く。そして、ぼくたちの文学は「原っぱ」文学とでも名付けるよりほかはないということになる。小学校や中学校の校庭などではなく、餓鬼大將が支配する「原っぱ」にこそ、自己形成空間を、芸術や文学を支える原風景を見出しているということは、興味深いことと言わねばならぬ。

後年、北杜夫がトーマス・マンに傾倒し、特に「トニオ・クレイゲル」に詩人、芸術家の運命を感じたのは、彼の「原っぱ」における「みそっかす」のお坊っちゃんという体験がその共感のもとになってるように思える。彼は「原っぱ」では、ベイゴマやメンコのうまい、キャッチボールも角力も強い、女の子たちから憧れられる「原っぱの英雄」になりたかったのだが、不器用で気の弱いお坊っちゃんの彼は、こわごわ仲間に入れてもらうみそっかすに過ぎなかった。少年の頃、少女の尊敬をかち得たいと熱望していたマンは、やがて詩人、芸術家として認められるようになるが、かつての少女たちは今もフットボールの選手たちに夢中になっていて、マンに見向きもしない。そういう内向的な少年のかなしみを培う場所こそ、「原っぱ」にほかならないのだ。

そう考えると、「原っぱ」は、「幽霊」の子供たちが、石やレンガをすり合わせて赤や黄の粉をつくったり、泥をこねたり、トンボ釣りや蟬採りや、草を結んで毬をつくったり、また、どんぐりを拾い集めたりして、狩猟採集の頃のなりわいを無意識に真似する縄文土器時代へのタイム・トンネルの役割だけではなく、ヨーロッパの牧畜民の子供たちと同じように、平等に群がって遊

ぶ、日本の社会では珍しい、拓がった社交空間であり、身分には関係なく、トニオ・クレイゲル的なかなしみを味わえる唯一の詩人形成空間であったとも言える。この「原っぱ」は、夏目漱石、谷崎潤一郎、白樺派、芥川龍之介、堀辰雄、そして大岡昇平、武田泰淳、福田恆存ら山の手っ子にも共通する自己形成空間であり、故郷であり、原風景であると言えよう。

だが北杜夫の「原っぱ」への憧憬、執着は、ほかの都会生れ、山の手生れの作家より、深く強い。そしてなぜ都会生れの少年が、かくも自然の動物、生物、草木や昆虫を愛し、こまかく観察し、中学時代にはいっばしの昆虫採集の専門家になるぐらい熱中したのか。

ぼくはそこに坂口安吾が少年時代、毎日新潟の海岸の松林に寝転び、海や波や空や風や光や石に、故郷を、母を感じていたのと似た心情を感じずにはいられない。安吾は、没落しかかっていたが越後数家の旧家、時の総理大臣も親友である有力政治家の父、旧家の出で誇り高く家をとりにきっていた母、それらのいずれにもなじめず、家に安息を感じることができないまま、浜辺で孤独に遊んだ。それが家への反抗であり、自己確立の唯一の手段であったのだ。

北杜夫もそれに近い環境にいたのではないか。家は「榆家の人びと」に示されているように、祖父が建てた大仰な脳病院で、多くの人々がうやうやしく出入りしている。祖母、母は大病院主の家族として誇り高く格式をもって生きている。北杜夫にとっては、病院長の家付娘として使用人たちに君臨し、強い自我を通し、気品高くわがままに人生を生き、子供を厳しく躾ける母が怖ろしかったに違いない。普通そのような場合、子供たちは父の情愛と寛大の中に逃げるのだが、

この養子であり、家では母のわがままに悩まされ、頭のあがらない父は、精神医学者として優秀であるばかりでなく、近代短歌の第一人者としてアララギ同人に君臨し、しかも土着的性格を強くもった天才斎藤茂吉である。北杜夫は、父茂吉については多弁ではないが、その書くものには、しばしば父に対する畏怖の念が感じられる。父を及びがたい芸術家、歌人として尊敬している。そして母はその父を尻に敷き、勝手に家出するほどの女丈夫とあれば、北杜夫は父にも母にも、甘えることができない。

その家、いや父母の重みから、北杜夫は「原っぱ」に逃れる。みそっかすの彼は原っぱでも、群の遊びより、自然を友にひとり遊ぶ。さまざまな昆虫、草木が孤独な彼の友になり、探究欲の強い彼は、こまかに自然を観察し、それを、整理、分類しようとする。昆虫採集への異常なまでの情熱は、えらい父母に対するひそかな抵抗であったのだ。翰翹目しやうせきめの珍種を含むその歴大な昆虫標本は、彼の少年的自我の存在証明であり、城塞であったのだ。ここにこそ、父母の知らぬ、父母がふみこみ得ぬ、自主的な宇宙があった。彼は自然を、昆虫を観察する目で、ひそかに青山脳病院を中心とする斎藤家の人びとを、そして戦争へ向う時代の社会を観察、分類していたのかも知れぬ。そして「榆家の人びと」に出てくる米国よおくに叔父のような役立たずの余計者や桃子のような反逆者に、同じみそっかすとしての共感をおぼえていたに違いない。だいたい、大学の動物学科に入って昆虫の専門家になろうと子供の頃から志すこと自体、軍人になろう、スポーツ選手になろうというのと違って、役立たずの余計者の発想であり、青山脳病院に対する逃避的反逆と言っ

てよいだろう。

北杜夫は、珍しい高山の昆虫が多いという理由で旧制松本高校を志望し、入学する。しかし勤労動員中、東京の自宅が空襲に遭い、長年にわたって蒐集した昆虫標本が一夜にして灰となった。それは彼の今までの生涯を無に帰せしめた衝撃であった。この時、昆虫少年齋藤宗吉は死に、文学青年北杜夫が生まれたと言つてよい。毛虫が、蝶に羽化するために、繭をつむぎはじめたと言つた方がよいかも知れぬ。羽化する前の蛹が一時期透明になるように、十八歳の北杜夫も敗戦の虚無の中で透明になる。誰も登山しない日本アルプスを憑かれたように歩きまわる。透明な高みをもとめ、空に沁みて行き、無化することを願つたのであろうか。「私の季節感^{きせいかん}は真夏の青空の中に固着してしまつた」と書いた三島由紀夫のそれと通うものを感じる。二十歳前後の自己形成期に、敗戦にぶつかり、死から解放された当時の若者たちは、透明な虚無感の中でかえつて死を身近におぼえたものだ。

「岩尾根にて」の、日本アルプスを単独行しながら、墜死体を見ても物体を見るように無感動になり、高山の酔いとウィスキーの酔いとの中で、自己と他人とが同一化したような会話と、けだるい放棄、またすべての時間が奇妙にのろのろと進行する描写など、この時期の心象が見事にとらえられている。そういうけだるい自己放棄とも言えるニヒリズムは「霊媒のいる町」「河口にて」「羽蟻のいる丘」などの前期の短篇に共通している。これらの作品は透明な抒情と遠くに自分がいいるような不思議な雰囲気を持っている。そして「異形」とか「人工の星」とかの常識を超